

# 仙林寺だより

NO. 60  
編集・発行  
松田正貴

## 行事報告

### 出家得度式

得度とは、正式にお坊さんの仲間入りをして、仏のみ教えを信じ、仏の徳を身に受ける証として行われる大切な修行です。本日得度の日を迎えた大越裕好さん(五十七歳)、松田瑞生君(十三歳)は正式なお坊さんとしての歩みを進めます。裕好さんは求道者としての境涯を深め、瑞生君は仙林寺跡取りとしての期待を受けて新たな旅立ちの時を迎えました。特に瑞生君は出家したとは言え学生の身分、これから大いに世の中の見聞を広げ、人の痛みがわかる僧侶へと成長してもらいたいものです。裕好さんは、発心(仏の道を志す心)からのご出家です。元郵便局員という経歴の持ち主で、様々なボランティア活動を通じ豊富な利他行の実践経験をお持ちです。信仰を基盤とした社会貢献を目指します。仏教の基本は何よりも信。ご修行を通じて手放して信ずることが出来る坦懐なる心が養われるものと思えます。「行持道環」という言葉があります。行持とはご修行の事、環とは輪、輪には切れ目がありません。誰にでもその時なりの境涯があり、その人なりのご修行があるものでしょう。そのように考えるとき、修行に始めなど無いこと、ましてや終わりの訪れることも無いものでしょう。日日は修行。

### モラロジ―東北ブロック

#### サマーキャンプ 坐禅体験

三十日、今年で六回目を数える恒例の坐禅会です。昨年と変わったのは若干のメンバー変更。遠くは横浜から参加の子もいたようです。さて、メンバー変更といえはこちらも同じ、指導要員もバージョンアツブです。得度式を済ませたばかりの裕好さんも仙林寺で



は即戦力、早速坐禅の組み方指導にかり出されず。朝晩の坐禅を欠かす事無く修行を続ける裕好さん、指導にも力が入ります。その熱意に圧倒されてか？腹痛でリタイアの子が約一名。緊張の糸がほぐれればすぐさま戦線(朝ごはん)復帰できるところがとつても子供らしくていいですね。終了後は、会館にて質疑応答の時間。なかなか出ない質問の呼び水にと、僧堂安居あ(ご)正式な道場に修行に行くこと)準備の為床の間に並べられた什物(じゅうもつ)(お寺でまた僧侶が使う品々)を紹介すると一変、引率の親御さんまでが興味津々です。応量器(食事の入れ子式容器)の使い方から命の大切さまで話が及び自己満足も佳境に。ラジオ体操ならぬ首の上下運動もほとんどが良いようで、「腹へった」質問ならぬ訴えの音が響いたところでもそろそろタイムアップか。本堂前の記念写真が済めば最後のご挨拶。サマーキャンプ最終日大トリの一番終了です。

### ひつじゅん 「養生」

シート、テープ、さて に入るのは何？防水でもなく、一時流行った樹液でもありません。今回は、先月の「普請」に続き建築用語としても使われる「養生」です。普請に際しては、様々な職人さんの手数を経て仕上りの時を迎える訳ですが、その何れの職種にも数々の工程があり、工程を踏む前段階の作業として「養生」があります。今ではその言葉の響きに懐かしさを留めるのみの感がある丁稚奉公、修業の段階で初めに教え込まれるのもこの養生作業だそうです。「養生の丁寧さは仕上がり

の仕上げには影響はないにしても、気を抜けない作業です。養生訓と言えは、養生の術は、こちらは身体をそなふ物く、養生の術は、まず我が身をそなふ物は、内邪と外邪となり「健康法の第一は身体を損なう原因をばくす事にある。身体の内なる原因は自分自身の欲望、外なる原因は環境によるもの、欲望のおもむくままに生活する事を戒め、環境の変化に常に敏感に対処する事の大切さを説いたものと思えます。また「内欲をこらえてすくなく、外邪を畏れて防ぎ、これをもつて元気をそこなわず、病なくして天年を永く保つべし」と「養生の肝要は畏れること、忍ぶこと」と続きます。「畏」とは自分の欲望に対するもの、また広義として神や仏、いわゆるサムシンググレートへの畏敬とも考えられそうです。そして「忍」、老子曰く「人の命は我にあり、天にあらざり」。人の命は天からの贈り物に違いはないのですが、その寿命は私達の日頃の養生次第で変わる。あたかも炭火を風に当てれば早く消えてしまうようなもの、前述通り欲望を忍ぶのが肝要。かの白楽天も「福と禍とは慎むと慎まざるにあり」と自戒のすすめとも思える言葉を残しておられます。ところでこの白楽天、道林禅師との問答「七仏通戒の偈」の中で、仏教の大事は、善を成すこと悪を成さぬ事。三歳の童子でも知れる事ながら七十の古老でも実践は難しい。ここでまた養生訓に曰く、善悪を成す成さぬは、その信じる基準を持つ事が大切。仏教における「得度」では、その修行の中心は授戒。授ける「戒」とは、十六ほどある戒律の事。信じる先をみ仏と定め、善を成す方向性を導く教えを戒、戒を基準と言ひ換えれば、天年を永く保つ術として養生があり、またその先に「戒」を眺めれば、禅僧が長命を保つのも「精進料理だけが理由ではなさそうです。心気は長く勤めは堅く色うすく口食細うして心広かれ」 天海僧正